

学 位 論 文 要 旨

氏 名 家 崎 萌

題 目 「居場所」を構造化した造形による授業開発研究
—日本とチェコ共和国を往還する実践を通して—

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究では、「居場所」を「物理的な空間の所在に加え、他者との関係を通して形成され、問い直される自己の存在意義と関わる場」と捉え、①日本とチェコ共和国を往還する「居場所」を構造化した造形による交流授業が、両国の児童にどのような変容をもたらすか、②日本とチェコ共和国を往還する実践を通じた「生きた問い」である「居場所」を軸に、美術教育の授業を開発する方策、の2点を明らかにする。

日本とチェコ共和国間で実施する交流授業は、両国の小学3、4年生の児童を対象とし、教員は、日本のクラス担任とチェコの教科担任のネイティブティーチャー2人と、両国を往還するプロジェクトティーチャーである筆者によるチームティーチングの体制をとった。a/r/tographyの研究手法論が提唱する「生きた問い」とは、J. デューイの「質的思考」を基盤とし、実践に参入する「不確定な自己」から探究する問いである。本研究では、複雑な「事態」の連続である経験を対象化する働きとして「能動」と「受動」の「質的思考」を重視した。そして、制作者でもある筆者の、他者や場との関わりから浮かび上がった問いを、実践に参入しながら、両国の交流授業に構造化して授業開発、実践を行い、児童の変容を中心に記述、分析していく一連のサイクルにより授業開発研究を進めた。

第1章では、本研究の目的と「生きた問い」を記述するアプローチ等の方法を示し、本論文の構成を記した。

第2章では、先ず、E. レルフの場所の現象学による「内側性」「外側性」を、「居場所」の造形活動をめぐる経験の「質」を捉える手がかりにした。次いで、今日の社会や教育における「居場所」を他者との関わりから位置付けた。そして、日本とチェコの美術教育を規定する枠組みを確認し、チェコのコミュニケーションへの参画、日本の自分の見方・考え方からの広がり大切にすることの特徴を読み取った。

第3章では、日本とチェコにおける制作実践や作品事例の記述に基づき、出来事としての身体と＜定位＞（E. レヴィナス）、「境界化」と「統合」（J. ベリー）を援用し、自己のまとまりを意識するプロセスや、内と外の「事態」を経験する境界の「質」等の考察から、「居場所」を構造化する造形の要素を抽出した。

第4章では、チェコの小学校で現地の教員と筆者で共同したこれまでの授業のうち、「居場所」を軸に展開させる契機となった授業や、日本とチェコの児童による交流を試みた授業を検証した。危うく繊細な「居場所」を表す筆者自身の作品を鑑賞する授業から「生きた問い」の共有が始まった。そして、問いを児童と共有する活動の実際から、本授業開発へ向け、教員でもある研究主体が両国の個別具体的な場に参入する必要性等の課題や、児童に場へ入り込むような内側への焦点化をもたらす『『居場所』の主人』の具現化等の要点が整理された。

第5章では、児童の変容を中心に事例を検証した。題材の柱に「自己のまとまりを託す造形活動」と「他者と関わる場の造形活動」を設定し、児童の手で形づくられた造形物を往還させ、両国で、それらの造形物を介して場に働きかける活動を展開させた。先ず、日本での授業「ディーテュは旅する」で、秘密の「いのちのもと」を粘土に入れてつくった造形物「ディーテュ」に愛着をもった日本の児童は、造形物のチェコへの旅立ちを知り葛藤した。次に、チェコでの授業「コドモ」で、チェコの児童は、日本の児童による造形物と手紙を受け取り、色や形を工夫した造形物「コドモ」を友だちとしてつくった。続いて、両国の造形物のための家や国をつくる授業「コドモ共和国」で、チェコの児童は、境界の内外に国の旗の位置付けを変える「事態」に対峙したり、矛盾する自他の境界を省察したりした。最終回の授業「一緒に居場所」で、チェコから両国の造形物と手紙を受け取った日本の児童は、形象化された関係から「他者」の応答を感受し、共感のまとまりの外側で＜他者＞と対峙する等、複雑に重層化する境界を省察しつつ、各々の「居場所」の造形を見出していた。

第6章では、一連の交流授業における児童たちの変容と本授業開発の方策と結果をまとめた。交流授業において、両国の児童は、触覚によるメタファーの形成を通じた愛着、出来事の身体による自己のまとまりや、想定外の＜他者＞との対峙から内と外の境界を形成する「事態」等を経験した。造形活動を通じて未知の＜他者＞に対峙した日本の児童、文脈を踏まえたいわば顔の見える「他者」に出会ったチェコの児童の異なる前提は、両国の「居場所」をめぐる活動での児童の変容にも影響した。不可逆的に展開する造形活動の場に参入し、自他の関係等を境界の視座から精査していくことにより、共感的な内側と同時に、その外側が生じ、内外の矛盾を含む複雑な「事態」を省察する児童の実際を明らかにした。

最後に、「外部参照性」が児童たちの自他の関係に「緊張感や生動性」（金子一夫）をもたらし、複雑な「事態」を「統合」する「居場所」をめぐる造形活動とその省察に、今日の教育で考慮すべき「生の悲劇性（複雑性）」（田中智志）の了解が織り込まれ得る意義を示した。そして、「生きた問い」を軸にした授業開発を、多様な教育の枠組みで学ぶ他者間をつなぐ教育実践学に資する方策とした。